

# ブラウス

サアーダット・ハサン・マントー

このところモーミンはひどくいら立っていた。彼の存在は、まるで乾いていない膜のようになっていた。仕事をしても話をしても、考えている時でさえ、彼は、言うに言われぬある種奇妙な痛みを感じるのだった。

座っていると、時々びくつとした。普通なら、音も立てずに生まれては消えてゆく泡のようにぼんやりとした想いが、モーミンの頭では大きな音とともに生まれ、割れてしまうのだった。心の繊細な膜に、足に刺のある蟻たちが這い廻っているという感じだった。ある種、異様な緊張が彼の体の器官に生まれ、そのために彼は奇妙な苦痛を感じた。あまり苦痛がひどくなると、自分自身を大きなすり鉢に入れて、誰かに「ぼくを砕いてくれ」と頼みたくなるのだった。

台所で香辛料を砕いているとき、鉄と鉄がぶつかり、衝撃音が天井に響きわたると、モーミンの足は

この響きをとでも心地好く感じるのだった。響きは足から、ひきしまったふくらはぎや太腿を伝わって心臓まで届き、心臓は強い風の中に置かれたランプの炎のように震えはじめたのだった。

モーミンは十五歳だった。十六歳になりかけていたのかもしれないが、自分の年齢について彼は正確なことを知らなかった。彼は健康な少年で、その少年らしさは若者へと急速に向かっているところだった。モーミンが全く気づいていないこの変化は、彼の血の一滴一滴に戦慄を生んだ。彼はその意味を理解しようとしたが、できなかった。

彼の肉体には、いくつもの変化が現われていた。以前は細かった首が太くなり、腕の筋肉は隆起し、のどぼとけが出はじめた。胸板が厚くなり、乳首に玉のようなものができていた。誰かがおはじきを一つずつ中に入れたかのように隆起していた。この隆起を手で触ると痛みを感じるのだった。時々、仕事の最中に、ふとしたはずみで、その丸みに手が

触れると、彼は落ち着きを失うのだった。厚くて粗いシャツの生地のごわごわした感触によってさえ、痛みを感じた。

風呂で沐浴している時や台所に誰もいない時、モームインはシャツのボタンを開けて、その丸みをじっと見つめるのだった。手でこすると、ずきずきと痛んだ。たわわに果実のなつた木が揺すぶられているかのように、震え上がった。しかし、それにもかかわらず、彼はこの痛みを生む遊戯にふけていた。ときどき押しすぎると、この丸みがつぶれて、その口からねばねばしたものが出てきた。それを見ると、何か罪でも犯したかのように感じ、彼の顔は耳たぶまで赤くなるのだった。罪と善行の報いについて、モームインの知識は限られていた。彼の考えによれば、他の人の前でできないような行為はすべて罪であった。そのため、恥ずかしくて耳たぶまで顔を赤く染めるのであった。

家のものはみなモームインに好感を持っていた。とても勤勉な少年だった。あらゆる仕事を時間どおりにするのだから、不平を言う機会などあろうはずがなかった。ディブティール・サーハブ（ディブティール

は普通 Deputy Collector 副取税吏の略。サーハブは（氏の意味）のところで仕事をして三か月しか経っていないかった。だがこの短い期間のうちに、彼は家のみんなに自分の勤勉な性格を印象づけていた。月六ルピーで雇われたが、二か月目にして二ルピー増額された。彼はこの家においてとても幸せだった。というのは、ここでは彼は評価されていたからだ。だがこのところ、彼はいら立っていた。ある種の放浪への欲望が生まれた。一日中、意味もなくバーザールをほつつき歩いたり、ひと気のない所に行つて、ずつと横になっていたか。

今、彼は仕事に関心が持てなかった。だが無関心ではあつても、怠惰ではなかった。そのため、家では誰も彼の内部の混乱を知らなかった。ラズイヤといえは、一日中、楽器をひいたり、新しい映画音楽のメロディーを憶えたり雑誌を読むことにあけくれていた。彼女はモームインを監視したことは一度たりともなかった。シャキーラはモームインにあれこれ仕事をさせ、ときどき彼を叱ることもあった。しかし、ここどころ彼女も、何着かのブラウスの型紙を作ることに没頭していた。ブラウスは、最新のスタイ

ルの服を着るのが好きな女友達のものであり、シャキーラは彼女から八着のブラウスを借りてきて、紙にその型をうつしていた。そのため、彼女はここ数日モーミンに注意を払わなかったのだ。

ディブテイー・サーハブの妻は厳しい女ではなかった。家の使用人は二人だった。モーミンの他に老婆がいて、彼女はほとんど台所の仕事をしていた。モーミンはときどき彼女の手助けをしていた。ディブテイー・サーハブの妻はモーミンに熱心さが不足しているのを見抜いていたのかもしれないが、モーミンにそのことを言わなかった。モーミンの心と頭と肉体を通り抜けている変革について、ディブテイー・サーハブの妻は全く気づいていなかった。彼女には息子がいなかったの、モーミンの心や体の変化を理解できなかったのだ。それに、モーミンは使用人だった……。使用人について誰が深く気にとめたりするだろうか。子供の時から老年に至るまで、使用人はすべての段階を歩いて踏破してゆき、周囲の人々は気づきもしないのだ。

モーミンの場合もまったく同様だった。このところ、彼は曲がり角を曲がって、それほど長くはな

いが危険に満ちた道へとやって来ていた。この道で、彼は足を速めたりゆるめたりした。実のところ、こうした道をどうやって歩いたらいいのかを、彼は知らなかったのだ。すばやく歩ききるべきなのか、それとも少し時間をかけてゆっくりと、あちこちのものに寄り掛かって踏破すべきなのか。モーミンの裸足の下で、やがて来たらんとする青春の丸くて油っぽい小石が滑り動いていた。そのため平衡を維持できないで、ひどく苛立っていた。この苛立ちのために、仕事をしている途中に、何度もビクリとして、無意識のうちに、掛け釘を両手でつかみ、それにぶら下がるのだった。そして、その掛け釘を両足でつかみ、細い線になるまで引っ張りたいたい欲望がわき上がるのだった。しかし、これらのことはみな、頭のどこか隅のほうで起こったことなので、彼はきちんとそれらの意味を理解できなかった。

無意識に彼は望んでいた。「何か起こればいいのに……何がだ？……とにかく何か起こればいいんだ。机の上にきちんと置かれた皿が突然ひっくり返るとか、ヤカンのふたが水の沸とうで飛び上がったたり、亜鉛メッキした水道管が押されて曲がり、水が噴水

のように吹きだしたりとか……。大きな背伸びをし  
たら関節がバラバラになって、すつきりするだろう  
な。……まだ見たこともないことが起こればいいの  
にな」

モーミンはひどく苛立っていた。

ラズィヤは新しいメロディーを覚えるのに熱中し  
ていたし、シャキーラは紙にブラウスの型をうつし  
ていた。シャキーラはこの作業を終えると、いちば  
ん気に入ったスタイルの型紙を目の前に置いて、紫  
色のサテンのブラウスを作りはじめた。今度はラズ  
ィヤも自分の楽器や映画の挿入歌がのっているノー  
トを捨てて、そちらの方に注目せざるをえなくなっ  
た。

シャキーラはどんな作業でも、用意周到に、そし  
て熱心にやった。彼女は腰をじつくり落ちて着けて裁  
縫をやった。妹のようにはたばたするのには、好きで  
はなかった。一針一針を、間違いのないように考え  
ながら、落ち着いて縫っていった。最初に型紙を切  
っておいてから布を裁断するので、寸法も非常に正  
確だった。こうすると時間は余計にかかるが、びっ  
たりしたものができ上がるのであった。

シャキーラはむっちりとして健康的な娘だった。  
ぼつちやりとした柔らかい手をしており、ふつくら  
として形の好い指の根元の関節のところには、かわ  
いい窪みがあった。ミシンを動かすと、この愛らし  
い窪みは、手の動きによって時々消えてしまうのだ  
った。

シャキーラはミシンも丁寧にかけた。彼女の二、  
三本の指がゆつくりと、とても器用にミシンの把手  
を廻すと、手首がわずかに曲がった。頭をすこしか  
がめると、ほつれ毛が下がってくるのだが、シャキ  
ーラは作業に熱中するあまり、それをどけたり、ま  
とめようとはしなかった。

シャキーラが紫のサテンを目の前に広げ、自分の  
寸法のブラウスを裁断しはじめると、巻尺が必要に  
なった。彼女の巻尺は、すり切れてぼろぼろになっ  
ていたからであった。鉄製の物差しはあったが、そ  
れで腰や胸の採寸ができようはずもなかった。自分  
のブラウスは何着もあったが、彼女は以前よりも少  
し太ってしまったので、もう一度採寸をしたか  
ったのだ。

彼女はカミーズを脱いで、モーミンに声をかけた。

彼がやって来ると、こう言った。

「モーミン、シャキーラ・ビービーが頼んでたって言って、急いで六号室の人から巻尺を借りてきてちょうだい」

モーミンの視線がシャキーラの白い肌着にぶつかった。彼はシャキーラのこうした下着姿を何度も見ていたが、今日は何か不思議なとまどいを感じた。彼は視線をそらせ、あわてて言った。

「どんなのですか」

シャキーラはこう答えた。

「布製の物差しのことよ……ほら、目の前に物差しがあるでしょ。それは鉄製なの。もう一つ、布製のもあるのよ。六号室に走って行って借りてきてちょうだい。シャキーラ・ビービーが頼んでたって言うのよ」

六号室はすぐ近くだった。モーミンはすぐに巻尺を借りてきた。シャキーラはそれを受け取って、言った。

「ここにいてちょうだい。すぐに返しにいらしてもらうから」

そして彼女は妹のラズィヤに向かって言った。

「あの人たちのものを自分のところに置いたりしたら、あのお婆さんがさんざん催促してきて困らせられるものねえ。……こっちにきて、ここから測ってちょうだい」

ラズィヤがシャキーラの腰と胸の寸法をはかりはじめると、二人のあいだでいろいろな会話がかわされた。モーミンはドアの敷居のところ立って、苦痛をとまなう沈黙を守って、これらの話を聞きつづけた。

「ラズィヤ、どうしてちゃんと測ってくれないの。この前もそうだったじゃない。あなたが測ったら、私のブラウス、メチャメチャになっちゃったのよ。上の方で布がフィットしないと、わきのあたりがだぶついちゃうのよ」

「どこを測ったらいいのか、姉さんが変にごちゃごちゃ言うからよ。ここを測りはじめたと思ったら、もっと下を測って、って言うし。……ちよつと違ってたからってどうってことないじゃないの」

「あら、何てこと言うの……フィットしてこそ美しいのよ。スライヤーを見てよ。すごくフィットした服を着てるでしょ。しわが一つもないような服が、

とても素敵に見えるのよ……さあ、測ってちょうだい……」

こう言うと、シャキーラは息で胸をふくらませはじめた。十分にふくれると息をとめ、押しつぶした声で言った。

「さあ、早くしてちょうだい」

シャキーラが息をはいたとき、モーミンはシャキーラの中にあるゴム風船が破裂してしまつたかのよう感じた。彼はうろたえて、こう言った。

「巻尺を下さい、ピーピー……。返してきますから」  
シャキーラは彼を叱りつけた。

「ちよつと待つてなさい」

こう言っているうちに、巻尺が彼女の裸の腕に巻きついてしまつた。シャキーラがそれをはずそうとした時に、白いわきの下にある黒々とした毛のかたまりが見えた。彼自身のわきにも同じような毛が生えだしていたが、彼女のそれはとても魅力的に思えた。戦慄のようなものが彼の全身を走つた。あの黒い毛が自分の髭になつたらいいのにと、奇妙な欲望が生まれた。子供の頃、トウモロコシの黒や金のヒゲを引き抜いて、自分の髭に見立てたものだった。

た。髭をつけるときにザラザラとした感触がしたものだ、モーミンのその奇妙な欲望は、鼻や上唇の上に同じような感触を与えた。

シャキーラの腕はもう下ろされて、わきは隠れてしまつていた。だがモーミンは今もあの黒い毛のふさを見つづけていた。彼の想像の中で、シャキーラの腕は上がつたままで、わきからは黒いものがぞいていた。

少しして、シャキーラはモーミンに巻尺をわたして言った。

「さあ、返してきてちょうだい。とても感謝していつて言うのよ」

モーミンは巻尺を返して、もどつて来ると、中庭に座つた。彼の頭にはぼんやりとした想いが浮かんだ。彼は長い間その意味を理解しようとした。何も分からないでいるうちに、無意識に彼は自分の小さなトランクを開けた。その中にはイード（イスラーム教の祭）用に新調した服があつた。

トランクのふたがあげられ、新しいラッター（布の一種）の匂いが鼻にとどくと、彼は沐浴して、その新しい服を着て、まっすぐにシャキーラ・ピービ

「のところがへ行って、挨拶したいと思つた。……彼のラッターのシャルワールは、どんな衣ずれの音をたてるだろう。そして彼のルーミー帽（筒型で上部がややすばまった帽子）は……」

ルーミー帽のことを考えると、帽子のふさがモーミンの眼に浮かんた。そしてそのふさは、すぐさま、シャキーラのわきの黒々とした毛のふさに変わつた。彼が服の下から自分の新しいルーミー帽を取りだし、その柔らかくて弾力のあるふさを手で撫ではじめた時に、中からシャキーラ・ビービーの声がした。

「モーミン！」

モーミンは帽子をトランクに入れ、ふたを閉めて中に入った。そこには、シャキーラが型紙どうりに裁断してばらばらになつた紫色のサテンの布があつた。光沢があり、なめらかな布切れを、一か所に置いて、彼女はモーミンに注意を向けた。「何回も声をかけたのよ。寝ていたの？」

モーミンはどもつた。

「いいえ、ビービー・ジー」

「じゃあ何をしていただけの？」

「別に……別に何もしていません」

「何かしていたに違いないわ」

彼女は、こう質問しながらも、実のところは、これから仮縫いしなければならぬブラウスのことを考えていた。

モーミンは照れ笑いをしながら答えた。

「トランクを開けて、新しい服を見ていたんです」  
シャキーラはどつと笑いだした。ラズイヤもつられて笑つた。

シャキーラが笑っているのを見て、モーミンは奇妙な慰めを感じた。そして、その慰めが、シャキーラがもつと笑うようなばかげた行動をしようという欲望を彼の心に生んだ。そこで少女のようにはにかみ、恥ずかしそうな口調で彼は言った。

「奥さまからお金をもらつて、絹のハンカチも買ってこようと思つているんです」

シャキーラは笑いながら彼に尋ねた。

「ハンカチをどうするの？」

モーミンははにかんで答えた。

「首に巻くんです……とてもかっこいいだろうなあと思ふんです」

これを聞いて、シャキーラとラズイヤは二人とも、

長いあいだ笑いつづけた。

「首に巻いたりしたら、いいこと、そのハンカチで絞首刑にしてやるからね」

こう言つて、シャキーラは笑いを押さえようとした。そしてラズィヤに言つた。「この子つたら、私に用事を忘れさせるんだから。ねえ、ラズィヤ、私はこの子をなぜ呼んだんだっけ？」

ラズィヤは答えずに、二日間けいこしている新しい映画音楽のメロディーを口ずさみはじめた。その間に、彼を呼んだわけを、シャキーラ自身が思い出した。

「いいこと、モーミン。この肌着を脱いで渡すから、薬屋のとりの新しく開店した店があるでしょう。ほら、あの日私と行った。あそこに行つて、これと同じような肌着六枚でいくらになるか尋ねてきてちょうだい。……六枚買うから、絶対にまけてくれるよ……わかつたわね」

モーミンは「はい」と答えた。

「それじゃあ、ちよつとどいてちょうだい」

モーミンは外に出て、ドアのかけに立った。

少ししてから肌着が彼の足元に落ちてきた。そし

て中からシャキーラの声が出た。

「この種類で、これとまったく同じデザインのものを買いたい。違つたらだめだつて言うのよ」

モーミンは「わかりました」と言つて、少しだけ蒸気にさらされたかのように、汗で濡れている肌着を取り上げた。体の匂いもついていたし、心地よいぬくもりが残っていた。これらすべてのことをモーミンは素敵だと感じた。

彼は子猫のように柔らかいその肌着を、手の中でまさぐりながら、外に出ていった。値段を尋ねてバーザールから戻つてくると、シャキーラはブラウスを縫いはじめていた。その紫のサテンのブラウスは、モーミンのルーミー帽のふさより、ずっと光沢があり、しなやかだった。

このブラウスは、多分、イード用に作られているのだ。イードはもうすぐそこまでまわつていたのだ。糸を持つてきたり、アイロンを出してきたり、針が折れると新しい針を持つてくるようにと、モーミンは一日に何度も呼ばれた。夕方近くになり、残りの作業を次の日にまわすことにした時、シャキーラは糸くずや紫のサテンの不用な切れはしを片付け



るためにさえも、モーミンを呼んだ。

モーミンは入念にそうじをして、残ったものはみな外に捨てた。だが、サテンの光沢のある切れはしは自分のポケットにしまい込んだ。……まったく意図はなかった。彼はそれらをどうしようとしているのか自分自身知らなかったのだ。

次の日、彼はポケットからはぎれを取りだし、隅に座って布をほぐしはじめた。長いことその遊びに夢中になっていた。ついには糸の短い切れはしのふさのようなものができあがった。それを手にとり、彼は押してみたり、まさぐってみたりした。だが、彼の頭の中にあつたのは、自分が見た黒い毛の小さなふさがある、あのシャキーラのわきであつた。

その日もシャキーラは彼を何度も呼んだ。……紫のブラウスのあらゆる姿が、彼の眼を横切つていった。最初に仮縫いされたとき、ブラウスには白く長いしつけ糸が至るところにあつた。それからアイロがかけられて、しわがみんななくなり、光沢も一段と増した。そのあとシャキーラは、仮縫いの状態でそれを着て、ラズイヤに見せた。別の部屋にある化粧台の横の鏡で、そのブラウスをあらゆる角度か

らよく確かめて、十分に納得がいくと、それを脱いだ。狭かったり広かったりしたところに印をつけて、具合の悪いところをすべて直した。もう一度着てみて、完全にびったりしているのを確かめてから、本縫いを始めた。

サテンのブラウスが縫われている一方で、モーミンの頭は千々に乱れていた。部屋に呼ばれると、彼の視線は、光沢のあるサテンのブラウスに止まるのだった。すると、「手で触つてみたい、ただ触るだけじゃなく……自分のごつい手で、柔らかくなめらかな表面を、長いあいだ撫でつづけたい」という気持ちが起こるのだった。

彼はあのサテンの切れはしで、ブラウスの柔らかさを推測した。彼が切れはしから抜いた糸はさらに柔らかくなつていた。それらの糸でふさをつくり、もんでいると、ゴムのような弾力があることもわかった。……部屋に来るたびにブラウスを見た。すると彼の頭はすぐにシャキーラのわきに見つけた黒い毛の方へと向かうのだった。「あれも、このサテンと同じくらい柔らかいのだろうか」と彼は思った。ブラウスがついにでき上がった。……モーミンが

床を濡れた布で拭いているところに、シャキーラが入ってきた。彼女はカミーズを脱いでベッドに置いた。モーミンがサンブルとして持ってゆき、値段を聞いてきたのと同じ種類の肌着を身につけていた。……その肌着の上にシャキーラは自分の手で縫ったブラウスを着て、前のホックをかけて、鏡の前に立った。

モーミンは床をきれいにしながら、鏡の方を見やっていた。今やブラウスには命のようなものがやどっていた。一、二か所、白銀のような光沢を放っていた。……シャキーラはモーミンに背中を向けており、ブラウスがびったりしているため、背骨がくつきりと浮かびあがっていた。モーミンは耐えきれずに、彼女に言った。

「ピーピー・ジー、あなたは仕立屋さんよりも上手ですわね！」

シャキーラは自分への賞賛を聞いて喜んだが、ラズィヤの意見を聞きたくて、うずうずしていた。そのため彼女は「素敵でしょう」と言っただけで、外へかけ出していった。……モーミンは黒く光沢のあるブラウスの残像が映っている鏡をじっと見つめ

ていた。

夜に、その部屋に水差しを置きにやってくる、釘にかけられた木のハンガーに、あのブラウスがかけられていた。部屋には誰もいなかった。そこで彼は歩み寄って、まずはじっと見入った。そしておそれるおそれるブラウスを手で撫でた。こうしていると、風が触れるのとまったく同じように、誰かが自分の体の柔らかい産毛を、ゆっくりと撫でているように感じた。

夜寝ると、彼はいくつもの荒唐無稽な夢を見た。

……ディブティー・サーハブが山ほどある石炭を砕くようにと命じた。彼が一個の石炭を持ち上げて、ハンマーでたたくと、それは柔らかい毛のふさとなった。……黒い粗糖の細い糸状になったものが丸い塊となっていた。……そしてこの玉は黒色の風船となつて空を飛びはじめた。……ずっと上まで行って風船は割れはじめた。……やがて突風が吹いてきて、モーミンのルーミー帽のふさがどこかに消えてしまった。……ふさを探しに出かけた。……見たことのある場所や知らない場所をまわり続けた。……新しいラッター布の匂いがどこから漂ってきた。それ

から一体どうしたことか……一枚の黒いサテンのブラウスに手が触れた。……少しのあいだ、彼は何か脈をうっているものを手で撫でつづけた。そして急に飛び上がった。一瞬、彼には何が起こったのか理解できなかつた。その後彼は、恐怖と驚きと不思議な状態に置かれていた。最初は痛むような熱さを感じ、数秒後に彼の体を冷たいもののはい廻った。

使用テキスト：'Bulauz', "Manto ke afsāne"

Maktaba-e Urdu, Lāhaur, n. d. pp.149-163.

解説 この作品は三〇年代後半に書かれた。マン  
トー（一九二一—五五）については、すでに大同生  
命国際文化基金より短篇小説集が二冊出版されてい  
るので、それを参照されたい。